

科学館開館30周年に寄せて

大阪市立科学館 館長 齋藤吉彦

大阪市立科学館(科学館)は10月7日に開館30周年を迎えます。ここでは30年の自慢話と抱負を語りたいと思います。

科学館は開館当初は年間71万人の人々に賑わいました。しかし、年々その勢いを失い10年後には45万人までに減少しました。しかし、こ

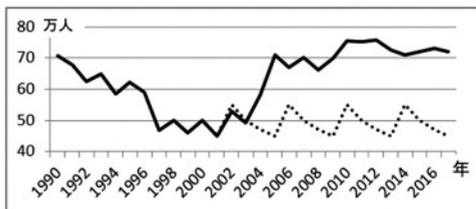


図1 科学館の来館者数

から科学館はV字回復をしたのです。今では開館時以上の70万人を超えるのが常となっています(図1の実線)。さらに今年はプラネタリウムと展示場のリニューアル効果で80万人の大台を超える勢いです。某博物館の館長さんに教わったのですが、このようなV字回復は博物館の世界では非常識なことで、ノコギリ理論というのが常識だそうです。ノコギリ理論とは、博物館などは開館バブルで開館時は来館者が多いけど、年々減少して落ち着いた数字になる。その後は図1の点線のようにどんなことをやってもちょっとは上昇するがまた落ち着いた数字にもどる。これを繰り返してノコギリの歯ようになるのが常識だそうです。

ではなぜV字回復という非常識なことが起こったのでしょうか？科学館の思い上がりかも知れませんが、次のようなことと考えています。開館当初、学芸員は3名だけでしたが、年々学芸員が増員され1999年に総勢11名になりました。そして年を追うごとに新米だった学芸員が熟練し、いい仕事ができるようになって、多くの市民から支持を得ているのです。本当でしょうか？どのようないい仕事かというのは嘉数学芸員が次ページ以降に書いていますので、読者の皆様の厳しい目でご確認ください。

ただし、科学館30年だけの力ではこのような非常識なことはありえません。科学館の前身は1937年に開館した由緒ある大阪市立電気科学館(電気科学館)、その伝統を引き継いで1989年に科学館が開館したのです。電気科学館は東洋で最初にプラネタリウムを導入した日本で最初の科学館で、半世紀に渡る活動で約2千万人が来館、多くの市民に愛されました。手塚治虫が通い詰めたというのは有名です。また、多くの科学者や技術者に人生のきっかけを与えました。このような伝統を携えて3名の学芸員が電気科学館から移籍してきたのです。

30周年は通過点、1世紀の伝統を築こうと、科学館はまだまだ精進します。が、科学館だけの力では不可能です。みなさまの叱咤激励、そして参画があれば百人力、どうぞよろしくお願いいたします。

科学館30年のあゆみ(1) 1989～1999

科学館の基礎を作った10年

大阪市立科学館は、大阪市政100周年記念事業として、1989(平成元年)年10月7日にオープンしました。土地は大阪大学理学部の跡地を使用し、建物・設備は関西電力株式会社より関西の電気事業創業100年を記念して寄贈されました。

新科学館は、地上4階、地下1階建てで、1～4階が展示場、地下1階には直径26.5メートルのプラネタリウムドームがあります。その他、喫茶コーナー、ミュージアムショップ、直径50cm反射式望遠鏡を備えた天文台等を有しています。

科学館のテーマは「宇宙とエネルギー」。1937(昭和12)年開館の市立電気科学館の伝統を受け継ぎながらも、扱う分野を天文、物理全般へと広げました。その後は化学、気象にも守備範囲を広げ、幅広く科学を楽しんでいただけるよう務めています。

開館からスタッフが力を入れたのは展示場のバージョンアップで、パネルや映像による説明中心だった開館当初の展示から、自然科学の現象を実際に確かめ実験できる「参加体験型」展示と、科学に関する本物の資料を紹介する「実物」展示を融合させた展示スタイルへの移行を進め、2回の展示改装を行いました。これにより、現在まで続く展示方針の基礎ができました。また、博物館法上の登録博物館にも認定され、大人から子どもまで、あらゆる世代が科学を楽しめる活動を目指しました。



写真1:建設中の科学館(1988年)



写真2(左):1994年の第一次改装で登場した4階天文コーナー



写真3(右):体験型展示と実物展示が融合したサイエンスタイトンネルは1998年登場

科学館30年のあゆみ(2) 2000～2009

新しいスタイルの確立を目指した10年



写真4:2004年新装のプラネタリウムホール

市民により親しまれる科学館を目指したチャレンジは続きます。2003年の冬から2004年7月にかけて、プラネタリウムの機器更新工事を実施しました。光学式投影機の更新に加え、コンピュータの画像をドームいっばいに映し出す全天周動画システムを新たに導入し、演出の幅を大きく広げました。また、更新を機に投影スタイルを生解説中心に変更し、学芸員が専門性と個性を活かしながら、天

文学の動向や投影対象等によって、その場に応じた解説を行うことが可能となりました。

またこの10年間では、市民に自らの興味・経験・知識などを生かして科学館活動に参画していただくボランティア活動を本格化させ、2005年には展示解説の「サイエンスガイド」、2009年からはサイエンス・デモンストレーター研修修了者によるサイエンスショー「エキストラ実験ショー」を開始し、来館者からも好評を博しています。

さらに、第三次展示改装は2008年に完成し、日本の科学館にはあまり例のない化学のフロアが誕生しました。また、手軽に持ち運び出来るモバイルプラネタリウムや実験道具を使って科学館の外に出て活動するアウトリーチ事業もこの時期にスタートしています。ほかにも、この頃に始めた活動の多くは現在も継続しており、科学館活動の基本的な部分を支えています。



写真5:モバイルプラネタリウム初披露は
大阪市役所にて(2006年12月)



写真6:サイエンスガイドの活動(2015年
撮影)

科学館30年のあゆみ(3) 2010～2019

大阪流の定着を目指した10年

2004年にプラネタリウムで導入した全天周動画システムは、その後全国にある多くのプラネタリウム館にも普及したため、科学館では学芸員が企画したオリジナル番組の配給を開始し、他の施設でも大阪の作品が投影されるようになりました。特に2009年に共同制作した「HAYABUSA-Back to the Earth-」は全国約70館で投影される大ヒット作となっています。



写真7:はやぶさ帰還カプセル公開(2010年)

また、世界天文年(2009年)や世界化学年(2011年)、世界光年(2015)など、国際的に定められた企画に連動した企画展や巡回展、各種事業の開催をはじめ、JAXAと協力して小惑星探査機「はやぶさ」の帰還カプセルの展示会を実施(2010年。近鉄百貨店本店にて)するなど、活動の幅を広げていきました。

さらに近年は海外の先進館との連携も強化し、ドイツ博物館へ学芸員・親善使節を派遣し将来にわたる連携を確認したほか(2016～2017年)、2018年にはオーストラリア国立科学技術センター(クエスタコン)と連携して、西日本各地でサイエンスショーと展示を行う「2018サイエンスサーカス・ツアー・ジャパン」も開催しています。



写真8:2019年3月30日。リニューアルオープン当日朝の科学館。開館前からたくさんのお客様が並び、オープンを待っておられました。

そして今年。開館30周年目の2019年春には、光学プラネタリウムの機器更新、展示場の一部改装によるリニューアルを実施。また、プラネタリウムと展示場のインターネット予約システムを導入してお客様の利便性向上も図り、さらにパワーアップしています！

大阪市立科学館は、ミッション「科学を楽しむ文化の振興」のもと、これからも40周年、50周年に向けて進化していきますので、今後とも応援をお願い致します。

(まとめ:嘉数 次人)

写真で見る科学館あれこれ



写真9:1989年10月6日の開館式の様子



写真10:開館当初の展示場4階



写真11(左):1995年1月17日の阪神・淡路大震災で壊れた展示物のひとつ



写真12(右):2004年のプラネタリウム改修時、ドームスクリーン張替工事の様子



写真13:復元された学天則(2008年)



写真14:サイエンスサーカス(2018年)

大阪市立科学館の主なできごと

1989 (平成元)	10月7日	開館
1990 (平成2)	5月24日	電気科学館より引き継ぎ、「星の友の会」発足
1994 (平成6)	7月29日	第一次展示改装グランドオープン
1995 (平成7)	1月17日	阪神・淡路大震災により展示物と建物の一部破損
	5月1日	小中学生の展示場入場料を無料化
1996 (平成8)	3月19日	博物館法上の登録博物館に認定される
	4月	「サイエンス友の会」発足
1997 (平成9)	5月18日	入館者500万人達成
1998 (平成10)	4月	プラネタリウム「学習投影」開始
	4月	「科学館友の会」が発足
1999 (平成11)	10月7日	第二次展示改装オープン
2000 (平成12)	4月22日	「ジュニア科学クラブ」発足
2003 (平成15)	12月1日	プラネタリウムリニューアル工事着工
2004 (平成16)	7月7日	プラネタリウムリニューアル。全天周動画システム導入。生解説中心の投影に移行。
2005 (平成17)	7月	展示場解説ボランティア「サイエンスガイド」発足
	9月22日	指定管理者制度導入
2006 (平成18)	9月28日	入館者1,000万人達成
2008 (平成20)	7月18日	第三次展示改装オープン 世界初のロボット「学天則」を復元、公開
2009 (平成21)	1月～	世界天文年2009を記念し、巡回展等を開催
2010 (平成22)	4月	エキストラ実験ショー開始
	9月	小惑星探査機「はやぶさ」帰還カプセル特別公開 (近鉄百貨店本店にて)
	12月5日	プラネタリウムを1日に7回投影開始
2011 (平成23)	4月～	世界化学年2011を記念し、特別展示等を実施
	12月11日	プラネタリウム全天周映像システムリニューアル
2013 (平成25)	9月28日	入館者1,500万人達成
2015 (平成27)	7～12月	国際光年を記念し企画展「光とあかり」等を実施
2016 (平成28)	10月	ドイツ博物館に交流使節を派遣
2018 (平成30)	1月	展示物に英語解説文を追加(一部)
	10～11月	オーストラリア国立科学技術センターと「2018サイエンスサーカス・ツアー・ジャパン」を共同開催
2019 (平成31)	3月30日	光学式プラネタリウム更新、第四次展示改装(一期。4階一部)完成、リニューアルオープン
	4月1日	地方独立行政法人大阪市博物館機構の運営へ